

受動名詞をめぐって

阿 部 幸 一

0. 序

近年、Chomsky (1981)、Roberts (1985)、Jaeggli (1986)、Endo (1988) 等で、受動名詞 (Passive Nominal、但し Roberts では Passive in NP) が受動文との対比で取り上げられている。Chomsky (1971) に端を発する \bar{X} -理論に基づけば、文 (S) も名詞 (NP) も基本的には同型とされるので、当然名詞句内においても受動化が認められる。しかし、名詞と文では範ちゅう的に異なるので、自ずから受動化に対する振舞いも違ってくる。そこで本稿では、受動文との対比に基づいて受動名詞の特徴を明らかにし、さらには受動構文の本質を探ることとする。

1. 受動名詞の特徴

1. 1 まず受動名詞の特徴を明らかにする前に、具体例を観察することにする。受動名詞とは、派生名詞 (類) (Derived Nominal) が、その派生の段階で受動化を受けたものと考えられる。

- (1) a. the destruction
- b. the destruction of the city
- c. *the destruction of the barbarians (the barbarians = Agent)
- d. the city's destruction
- e. *the barbarians' destruction
- f. the destruction by the barbarians

- g. the barbarians' destruction of the city
- h. the destruction of the city by the barbarians
- i. the city's destruction by the barbarians
- j. *the barbarians' destruction of the city by the enemy

この中で、(1h)と(1i)は標準的な受動名詞とされる。これらは、明らかに対応する受動文(2)の読みを持っている。

(2) The city was destroyed by the barbarians.

これに対して(1g)は、能動の読みしか持っていないので受動名詞からは除かれる。(1j)は主語位置にthe barbariansという動作主(Agent)と、By句にもthe enemyという動作主の2つの動作主を持つので、これは θ 基準によって排除されることになる。(1c)と(1e)に関しては、Chomsky(1981)では動作主は主題(Theme¹⁾)なしには現われることができずとして、排除している。(1d)については、Lebeaux(1986)によれば、the cityは被動作主(Patient)の読みか、せいぜい関係を表すだけで、動作主の読みはないので、受動名詞の一つと数えられる。(1b)と(1f)についてはかなり判断の揺れがあり、文脈に依存するところが大きい。(1f)に関しては、Williams(1987)やRoeper(1987)ではかなり文法性が低いとしている。これは、(1c)、(1e)同様に主題がないにもかかわらず、動作主に当たるBy句が来ることによると思われる。しかし、ここでは、Robertsの判断にしたがって(1b)、(1f)とも受動名詞の仲間であると仮定する。残る(1a)に関しては、それ自体には動作主も被動作主もないので、本来受動名詞とは呼べないが、Robertsでは次に見られるような、動作主の読みを要求する理由節及び副詞が来ている例を挙げているので、ここでは、いわば、(1f)のBy句が落ちた特殊ケースと考え、受動名詞の例と考えることにする。

受動名詞をめぐる

- (3) a. The destruction in order to prove a point was awful.
 b. The deliberate destruction was a calamity.

以上の事から、我々は (1 a)、(1 b)、(1 d)、(1 f)、(1 h)、(1 i) を受動名詞と仮定して論を進めて行くことにする。

1. 2 受動名詞の特徴を探るためには、受動文と対比する必要がある。原口・鷺尾 (1988) ではその特徴として次の3つを上げている。

- (4) a. 意味上の目的語が文法上の主語となって現れる。
 b. 意味上の主語が「動作主句」(BY句)として現れる。²⁾
 c. 受動形態形が存在する。

原口・鷺尾の条件に基づいて受動名詞の (1 a)、(1 b)、(1 d)、(1 f)、(1 h)、(1 i) を見てみると、(4 a) の条件に合うのは (1 d) と (1 i) であり、(4 b) の条件に合うのは (1 f) と (1 h) と (1 i) である。ところが、(4 c) の条件に合う受動形態形及び受動接辞に相当するものが受動名詞にはない。Endo (1988) では、派生名詞接辞の *-tion* が受動接辞に呼応するとしているが、この接辞は受動名詞以外の派生名詞にも現れるので、この接辞自体が一種の受動標識 (Passive marker) とは考えられず、また *-tion* 以外にも *-ance*、*-al*、*-ment* などの接辞をもつ受動名詞もあるので、*-tion* だけを受動接辞とするには問題がある。但し、*-tion* を他の派生接辞を代表するものと仮定できないことはないが。

したがって、受動名詞に関する限りは、(4 a) 及び (4 b) も必要条件とは言いがたく、あくまで十分条件の範囲内であって、(1 a) や (1 b) に及んでは受動構造の特徴を1つも持っていないので、Roberts のようにこれを受動名詞と見なす人にとっては語彙的な判断か文脈に頼らざるを得ない。

これに類して、Chomsky (1981) は格理論と θ 理論の観点から受動文について次のような主張をしている。

- (5) a. [NP, S] does not receive a θ -role.
 b. [NP, VP] does not receive Case within VP, for some choice of NP in VP.

加えて Chomsky は、受動形態形（受動動詞が head となっている VP）全体が格を吸収すると仮定している。これに対して、Jaeggli (1986) は受動接辞 (-en) 自体が格を吸収していると考えている。³⁾

以上のような考察に従って、受動名詞を眺めてみると、主語位置（構造的に文と名詞を統一して扱うために、今後はこの位置を指定辞の位置と呼ぶ）に被動作主に当たる基底受動動詞の目的語が、(1d) と (1i) では来ているので、その指定辞の位置は移動された要素を受け入れるため、 θ 理論に従って非 θ 位置となっている。但し、(1a)、(1b)、(1f)、(1h) に見られるように指定辞の位置には冠詞しかないので、受動文の場合との対比をなす。すなわち、受動文においては格理論の要請でもあるが、それに加えて(6)の拡大投射の原理に基づいて、文においては主語が必要とされる。

(6) Extended Projection Principle:

Representations at each level (i.e., LF, and D- and S-structure) are projected from the lexicon, in that they observe the subcategorization of lexical items.

Clauses have subjects.

ところが、受動名詞の場合は、前置が任意である。これは、文 (S) の場合と異なり、名詞 (NP) の場合には、(6)の原理による主語を必要としないことと、指定辞の位置での 's による属格の付与と of 挿入による目的格の付与の2つの選択があるので、移動は任意となる。一方、文の場合には、主語が義務的であることに加え、INFL からの主格付与しかないので、前置は義務的とならざるをえない。

(9)

| | 受動文 | 受動名詞 |
|--------|---------------|----------------------|
| 主語 | 必要 | 自由 |
| 主語位置 | 非 θ 位置 | 非 θ 位置 |
| 目的語の前置 | 義務的 | 任意的 |
| 受動接辞 | 有り | 無し |
| By句 | 動作主に限らない | 動作主に限る |
| 格に関して： | | |
| 格の吸収 | 受動接辞(受動形態形) | 非格付与子である名詞の特性？ |
| 格の付与 | INFLより主格 | 'sより属格 of挿入による目的格 |

2. 受動名詞の本質

2.1 Safir (1987) では、受動構文の本質を脱主題化 (Dethematization) にあるとし、受動文の場合には受動接辞という語彙的な要因が引き金となり、受動名詞の場合には By 句という統語的な文脈が引き金になるとしている。一見この考えは、もっともらしいように見えるが、脱主題化、言い換えれば、指定辞の位置が非 θ 位置であるという特徴は、なにも受動構文に限ったわけではない。非人称構文、存在文、繰り上げ構文 (Raising)、中間態 (Middle) 構文及び能格 (Ergative) 構文にも、共通するものである。

- (10) a. It rained yesterday.
 b. There was a man.
 c. John seems to be happy.
 d. Bureaucrats bribe easily.
 e. The boat sank.

受動名詞をめぐる

ここで、中間態構文と能格構文の区別は、Keyser & Roeper (1984) 及び Fagan (1988) に従うものであるが、中間態は伝統文法的に言えば、能動受動態 (Activo-Passivo) に当たるもので、形態的には能動形に似ているが、意味的には受動の読みをもつものであり、能格の方は、他動詞の目的語に対応する自動詞の主語を想定するので、共に指定辞の位置に被動作主をとる点で、この2つの構文を広い意味での受動構文として、言わば、疑似受動構文と考えられないこともない。しかし、残る3つの構文は明らかに受動の読みを持たないので、これらを同類として扱うのは誤りである。統語的操作から見ても、(分折的にはいろいろあるが) 非人称構文と存在文については、その非 θ 位置である指定辞の位置に虚辞 (expletive) 的な要素である *it* や *there* が挿入される点で、受動構文とは振舞いが違っている。英語の受動文や受動名詞の場合には、虚辞は来ない。

- (11) a. *It / There was played a game by Bill.
 b. *It / There was danced.
 c. *it / there's arrival of John
 d. *it / there's destruction of the city by the enemy

繰り上げ構文の場合にも、埋め込み文の主語が移動されない時には、それに呼応する文として虚辞が来れるので、受動構文とは対比をなす。

- (12) It seems that John is happy.

この違いは、非人称構文、存在文及び繰り上げ構文の指定辞の位置には、通常の構文で指定辞の位置に来る θ 役割を持つ項 (すなわち、動作主) が来れないことによると思われる。一見すると、(10c) は反しているように見えるが、指定辞にある John は動作主ではないことは明らかであり、Rozwadowska (1988) の分折に基づけば中立 (Neutral) と見なされるものである。

次に、動作主性 (Agentivity) に関して、疑似受動構文である中間態構文及

び能格構文と、純然たる受動構文の受動文と受動名詞を見てみると、次のような違いがみられる。

- (13) a. The book was sold deliberately.
 b. *The book sold deliberately.
 c. The book was sold to make money.
 d. *The book sold to make money.
 e. *Bureaucrats bribe easily voluntarily / to keep them happy.
 f. the city's deliberate destruction
 g. the city's destruction to prove a point

(ここで、理由節は指定辞の位置に動作主の読みを要求する)

さらにまた、By 句に関して Randall (1984) や Roberts (1985) では、中間態も能格構文も共起できないとしている。

- (14) a. *The book sold by John.
 b. *The Renault drove down the road by Mary.

これらの観察に基づけば、中間態構文も能格構文も明示的な動作主を持たないことは明らかである。したがって、動作主という意味的役割の視点から、真の受動構文と他の構文は明確に区別されることになる。

脱主題化が、受動構文の本質でないとすると、次に考えられる本質としては、先の 1. 3 の表(9)に基づけば、目的語の前置と By 句の存在ということになる。この 2 つの特徴は、脱主題化に比べると、絶対的なようには思われず、2 つの特徴において受動名詞と受動文では差異が見られる。目的語前置に関しては、受動文は義務的であるが、受動名詞は任意的であり、By 句に関しては、両構造とも任意的と思われるが、動作主の要求に関して違いが見られる。これらの差異を切り捨てて、2 つの特徴が受動構文の本質であるとは言えない。また、2 つの内の 1 つの特徴を持っていれば、受動構文であると言うわけにもいかな

受動名詞をめぐる

い。なぜなら、(1a)、(1b)のように目的語前置も By 句もないものまで、Roberts の判断では受動名詞の中に入れているので。

したがって、ここではまったく別の方向から、受動構文の本質を考える。本来、受動化するというをよく考えてみると、その一つは、Safir などが提案する脱主題化に見られるように、指定辞の位置を非 θ 位置にすること、すなわち、外部項を抑圧 (suppress) するという操作を考えているのである。ところが Safir 自身、受動名詞の場合には By 句により脱主題化が引き起こされると仮定しているが、その By 句自体が外部項に相当するものを取ることで、完全に外部項を抑圧したとは言いがたい。したがって、外部項である動作主に基づいて、受動構文の本質を述べることは適切でないことが分かる。

むしろ、受動構文に対して本質的と思われるのは、内部項である被動作主の存在の方である。したがって、受動文においては By 句 (動作主) がなくても許されるが、被動作主に当たる受動動詞の目的語はかならず現れなくてはならない。(これを、Chomsky (1981) では、受動文には主題が必要とすることになる。) このことは、受動名詞にも当てはまる。

しかし、被動作主の存在だけでは、受動構文の絶対条件にはなりえない。なぜなら、通常の能動形においても、被動作主は存在しているので。したがって、受動構文においては、受動の読みが得られる操作の一つとして、被動作主の前置が行われる。一方、受動名詞においても、被動作主の前置が見られるが、これが唯一の操作ではなく、(1f)に見られるように By 句しか現れない場合や (1a)、(1b)に見られるように明示的な統語的操作がないような場合がある。

そこで、今一度受動構文を意味的に考えてみると、その一つとして被動作主を際立たせることにある。(これは受動文においては被動作主を、文頭に前置させることにより表わされる。そして、この文頭の位置は、構造的に際だった位置と仮定される。)これを意味的な概念を持つ用語で言い換えれば、被動作主卓立 (Patient Prominence⁴⁾)ということになる。すなわち、受動文では被動作主を卓立する操作として、目的語前置があることになる。受動名詞の場合には、少々込み入っていて、受動文と同様に目的語前置もあるが、(1f)のように By 句しか現れないものもある。この場合には、さらに被動作主すら現わ

れていない。しかし、By 句の位置は統語的には付加詞の位置とされるので、本来外部項に当たる動作主が置かれるべき指定辞の位置に代わって、BY 句という付加詞の位置に来ているということは、間接的に内部項の被動作主を卓立していることになる。(1 b) のような場合には、内部項の被動作主しかないので、取りも直さず被動作主卓立が行われていると想定される。⁵⁾

この考えを裏付けるものとして、丸田 (1988) の Patient Constraint を取り上げる。

- (15) If the internal argument of X carries a Patient role, it is possible to eliminate the external θ -role of X.

この制約においては、被動作主の存在が外部項の θ 役割の剝奪、すなわち、指定辞の位置の脱主題化の前提となるので、私の仮定する被動作主卓立の原理は見事脱主題化と結び付いて、その優先原理となる。

残る (1 a) に関しては、一考を要する。その説明の前に、次の(16)の Kayne (1981) の例と(17)の Rozwadowska (1988) の例を挙げる。

- (16) a. Mary's robbery* (of her money) by John
 a'. Mary was robbed of her money by John.
 b. her cure* (of her cold) by the doctor
 b'. She was cured of her cold by the doctor.
 c. *Mary's gift of the letter by her teacher
 c'. Mary was given the letter by her teacher.
 d. *his order of a meal by the nurse
 d'. He was ordered a meal by the nurse.
- (17) a. *John's amazement of the film
 [Experiencer, or
 Recipient]
 b. John's amazement at the film

受動名詞をめぐる

[Experienced, or
Patient]

この例から分かることは、受動文では指定辞の位置に被動作主以外の要素も来れるが、受動名詞では被動作主に限るということである。つまり、(16a') や (16b') 等から明らかのように、動詞の直接的な目的語（被動作主）は、of 句のとり項の方であって、指定辞の位置に現れている項は、いわば間接的な目的語（間接的な被動作主）、言い換えれば、受容者（Recipient）と考えられる。したがって、これに対する受動名詞においては、受容者が卓立しているので、容認できにくくなる。一方、受動文においても、一見すると被動作主卓立の原理に抵触しているように見えるが、受動接辞という、形態的に受動構文を明示するものがあるために、被動作主の範囲が間接的なものまで制限が緩められると仮定される。ところが受動名詞の場合は受動接辞がないために、そういった制限の緩和が認められず、指定辞の位置に来るのは（直接的）被動作主に限られる。但し、(1a) のような項を一つも持たない構造は、文では許されないが、逆に被動作主がなんらかの形で卓立されていると分かる文脈（例えば(3)）さえ与えられれば、受動名詞であると判定される。

さらに、Rozwadowska の例を見てみよう。

- (18) a. *John's amusement of the children with his stories
 b. John's deliberate amusement of
 [Agent]
 the children with his stories
 [Experiencer]
 c. *the president's disillusionment of the people
 d. the president's deliberate disillusionment
 [Agent]
 of the people
 [Experiencer]

(ここで、副詞の *deliberately* は指定辞の位置に動作主の読みを要求する)

この例から分かることは、動作主の読みを要求する副詞を持たない (18a) と (18c) においては、逆に、指定辞の位置に被動作主が来ることも許すので、John 及び the president は目的語の位置にある the children 及び the people に対して、被動作主同士となって、 θ 基準により排除される。

2. 2 前の 1. 3 節では、受動名詞の By 句には動作主しか来ない事に触れたが、これは受動名詞の対応する能動名詞そのものの特徴に関わっていると思われる。そのことは Rappaport (1983) や Rozwadowska (1988) の例において、能動名詞自体がかなり制限を受けている事が分かる。

- (19) a. *the book's delight of the public
 a'. The book delights the public.
 b. *his rude behavior's disgust of Mary
 b'. His rude behavior disgusts Mary.
 c. *the president's disillusionment of the people
 c'. The president disillusioned the people.
 d. *the miracle's amazement of the people
 d'. The miracle amazed the people.

これに対する受動形 (文及び名詞) の場合には、被動作主に当たる項が来て適格となる。例としては、(19d) の場合のみ挙げる。

- (20) a. The people were amazed at the miracle.
 a'. the people's amazement at the miracle

Rozwadowska によれば、(19)の指定辞の位置に現れているものは、[Neutral] と分類され、それは変化の原因 (cause) とは考えられず、したがって中立な読みを持つと判断される。

実際には、動作主以外にも具格 (Instrumental) が能動名詞の指定辞の位置に現われる。

- (21) a. ? the rocket's destruction of the city
 b. ? the key's opening of the door

これに関して Grimshaw (1988) では、By 句に手段の読みを持つ項 (言い換えれば、by を by means of と置き換えても良いもの) なら来れるとしている。

- (22) The agitation of the soap solution by (means of) the machine's rotary action. . .

以上の観察から明かのように、能動名詞そのものが動作主 (または具格) を要求するようである。

類することが、動名詞と派生名詞との間の違いについても見られる。Roeper は次のような例を挙げている。

- (23) a. the destroying of the city to prove a point
 b. the destruction of the city to prove a point

ここにおいて、(23a) の動名詞の場合には、非文法的であるとする人はいないが、(23b) の場合には、しばしば否定する人がいると言う。また、動名詞と派生名詞の違いについては、Jackendoff (1977) にも見られる。

- (24) a. John's having criticized the book
 b. *John's having criticism of the book
 c. John's criticizing the book too often
 d. *John's criticism of the book too often

(23)、(24)から明らかのように、この違いは、動名詞の方は完了形を許す等、動詞性を留めており、文が持つ主題関係が保持されているのに対して、一方、派生名詞の方はより抽象度を高めて、動詞性が弱まっているため、文が本来持つ主題関係が不完全になっていると仮定される。

したがって、(19)–(22)に見られる派生名詞（能動名詞）に関しては、もっとも一般的である読みしか許されないの、その指定辞の位置には通常動作主（もしくは、間接的動作主として具格）が現れるのは、意味的にみて当然である。よって、能動名詞の指定辞に対応する受動名詞の By 句に動作主（具格も含む）しか来ないのも当然ということになる。

一方、(23b) の例については、派生名詞（受動名詞）が不完全な主題関係しか持たないために、理由節のコントローラーとしての動作主を想定しにくいことによると思われる。⁶⁾

次に、能動文を見てみると、かなり意味的に広い範囲まで記述できるので、その指定辞の位置にも動作主に限らず、いろいろなものが来る。したがってそれに対応する受動文の By 句にもいろいろな θ 役割を持つ項が現れることができる。

- (25) a. Everyone who entered saw Elmer.
 [Experiencer]
 a'. Elmer was seen by everyone who entered.
- b. Mary received the letter.
 [Goal]
 b'. The letter was received by Mary.
- cf. c. *John's sight by Mary.

したがって、受動名詞、能動名詞と受動文、能動文における動作主性に対する違いは、派生名詞と動名詞の間の相違と同様、もっぱら派生名詞（能動名詞と受動名詞）の不完全な主題関係の保持と文（能動文と受動文）の完全な主題関係の保持の違いに他ならない。

2. 3

次に、Kayne (1981) の挙げる例を見てみよう。

- (26) a. Russia's bombardment of Iran
 a'. the Russian bombardment of Iran
 b. Tanzania's invasion of Uganda
 b'. the Tanzanian invasion of Uganda
- (27) a. Iran's bombardment by Russia
 a'. ?*the Iranian bombardment by Russia
 b. Uganda's invasion by Tanzania
 b'. ?*the Ugandan invasion by Tanzania

Kayne の観察によると、派生名詞の指定辞の位置において、それが、意味上の主語を表わす場合（能動名詞）には、その代わりに形容詞が来ることは許されるが、意味上の目的語を表す場合（受動名詞）には、その代わりに形容詞が来ることは許されないとしている。これに類して、Roeper (1987) は次の例を挙げている。

- (28) a. *American training to prove a point
 b. Amerca's training to prove a point

(28a) が非文法的なのは、形容詞はあくまで推論ができるだけで実際の項ではないので、理由節の主語をコントロールできないと提案されている。さらにRoeperの次の例を見てると、

- (29) the German invasion

ここにおける形容詞の German は、推論的な読みとして動作主と被動作主の両方を許すと判断される。

そこで、受動名詞の指定辞の位置に形容詞が来ないについて次のように考える。(27a')と(27b')では動作主を示す項がBy句にあるために間接的に被動作主卓立を示して、受動名詞であると判定される。しかし、受動名詞の場合には実際の内部項が必要であり、指定辞の位置に来ている形容詞は推論的な読みしか許さないので、容認性が低くなる。一方、能動名詞の場合には、指定辞の位置に来る外部項には、実際の項である必要はないので、(26a')、(26b')が許されることになる。これは、とりもなおさず外部項と内部項の違いによるものである。

3. まとめ

第一章では、受動名詞の特徴を受動文と対比しながら考察し、その特徴として指定辞の位置には必ずしも主語が必要でないこと、目的語前置が任意であること、By句に来るものは動作主に限ることが示された。

第二章では、受動構文の本質として、従来の脱主題化に代わって、被動作主卓立が唱えられた。これに関わる幾つかの例が取り上げられ、受動文では、主語の現れる指定辞の位置に被動作主以外の項も来れるのに対し、受動名詞の指定辞の位置には被動作主しか来ないのは、受動文の場合には、受動接辞という形態的要素があるために、被動作主卓立という意味的要因が緩和されるのに対し、受動名詞の場合にはそれに相当する受動接辞がないために、被動作主卓立が絶対的条件となり、指定辞の位置には常に被動作主が要求される。

次に、受動名詞のBy句の動作主性については、派生名詞そのものが主題関係を不完全にしか保持していないので、もっとも一般的(無標)な形として、動作主を要求することによる。その他、受動名詞の指定辞の位置に形容詞が来ないのは、外部項と違い、内部項は真の項を要求するからである。

注

- 1) Chomskyの言う主題とは、実際には被動作主のことであるが、Lebeaux(1988)では、被動作主を[+Theme, +Affected]と分析しており、これに基づけば主題は被動作主と同等ということになる。

受動名詞をめぐる

- 2) しかし、次の例に見られるように、(4b)の条件は必要条件とは言いがたい。
- (i) a. Mary was kissed.
 b. Mary was kissed by someone.
 cf. c. The city was destroyed (by the barbarians).
- (ia) においては By 句が現れていないが、意味的には By 句をもつ (ib) と同意であるので、(4b)は受動文の十分条件と見なされる。
- 3) 尚、受動名詞の場合には、格の吸収に関して明示的な形態形はないが、それに対応するものとして、例えば、名詞の非格付与子を示す [+N] 素性を想定することができる。
- 4) 「卓立」という概念に関して実際には厳密な定義が必要である。ここでは、やルースな言い方で、「他の要素よりも顕著（優位）な場合」と考え、統語的には付加詞の位置よりも内部項が現れる目的語の位置の方が優位であり、目的語の位置よりも外部項の現れる指定辞の位置の方が優位と考える。
- 5) その他の例について、(1c)、(1e)が受動形としてだめなのは、被動作主がないからであり、(1g)で受動の読みが得られないのは、動作主が被動作主より優位な位置にあるために、被動作主卓立になれないからである。
- 6) これに関して、Roberts では、受動名詞に対し、外部項の θ 役割は付与される必要はないが、内部項の θ 役割は付与されなくては行けないと主張している。

References:

- Anderson, M. (1983) "Prenominal Genitive NP," *The Linguistic Review* 3, 1, 1-24
- Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," in R. Jacobs & P. Rosenbaum (eds.) *Reading in English Transformational Grammar*, Grim and Company, Waltham, Mass.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Endo, Y. (1988) "On Implicit Arguments in Derived Nominals," *Tsukuba English Studies*, 7, 141-158.
- Fagan, S. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 2, 181-203.
- Grimshaw, J. (1988) "Adjuncts and Argument Structures," in *Argument Structure* (in prep).
- Jackendoff, R. (1977) *\bar{X} Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jaeggli, O. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.
- Kayne, R. (1981) "Unambiguous Paths," in R. May & J. Koster (eds.) *Levels of Syntactic Representation*, 143-183.
- Keyser, S. & T. Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English."

- Linguistic Inquiry* 15, 3, 381-416.
- Lebeaux, D. (1986) "The Interpretation of Derived Nominals," *Chicago Linguistic Society* 22, 231-247.
- Lebeaux, D. (1988) "The Feature + Affected and the Formation of the Passive," in W. Wilkins (ed.) *Syntax and Semantics* 21, 243-261.
- 丸田 (1988) "A Thematic Constraint on Adjectival Passive Formation," read at the 6th *National Conference of The English Linguistic Society of Japan*.
- Randall, J. (1984) "Morphological Complementation," in M. Speas and R. Sproat (eds.) *Papers in Morphology*, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Rappaport, M. (1983) "On the Nature of Derived Nominals," in L. Levin, M. Rappaport & A. Zaenen (eds.) *Papers in Lexical Functional Grammar*, Indiana University Linguistic Club, 113-142.
- Roberts, I. (1985) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Doctoral dissertation, Univ. of Southern California.
- Roeper, T. (1987) "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation," *Linguistic Inquiry* 18, 267-310.
- Rozwadowska, B. (1988) "Thematic Restriction on Derived Nominals" *Syntax and Semantics* 21, 147-165.
- Safir, K. (1987) "The Syntactic Projection of Lexical Thematic Structure," *Natural Language and Linguistic Theory* 5, 4, 561-601.
- Williams, E. (1987) "English as an Ergative Language: The Theta Structure of Derived Nouns," *Chicago Linguistic Society*, 23, 366-375.